

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」2014年度第2回公開セミナー報告

タイトル：(アフリカ入門) ローカル NGO のグローバルな活躍～アフリカゾウとの共存をめざすタンザニア人の挑戦～

日時：2014年7月7日(月) 18時～20時

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所3階セミナー室(301)

司会：目黒紀夫(AA研)

講演者：ダミアン・トビアス・マゴリ(セレンゲティ開発調査環境保全センター)

参加者：16名

内容：

今回のセミナーでは、タンザニア北西部のセレンゲティ県で活動しているローカル NGO、セレンゲティ開発調査環境保全センター (SEDEREC : Serengeti Development Research and Environmental Conservation) のダミアン氏を講演者として招いた。はじめに、野生動物観光の名所として世界的に有名なセレンゲティ国立公園の周辺における人間とアフリカゾウとの関係が説明された。人間とアフリカゾウは同じ土地のうえで共存しているが、近年ではアフリカゾウによる農作物被害が増加しており、もともとアフリカゾウを神と崇めていた住民も、それを憎んだり嫌ったりするようになっている。そこにおいて地域社会を支援し、人間とアフリカゾウが平和裏に共存できるようにと地域の若者によって 2005 年に設立されたのが SEDEREC である。住民はさまざまな対策を施しているが、賢いうえに夜間に群れで畑を襲うアフリカゾウの被害を食い止めるのは非常に難しい。そうしたなかで、SEDEREC が新たに試みているのが養蜂箱を利用した対策である。それは最初にケニアで実験された手法であり、SEDEREC は住民と一緒にその設置と管理を行っている。試験的に養蜂箱を設置した畑では効果が確認されたが、すべての畑を囲い込むには養蜂箱の数が絶対的に足りておらず、また、住民が現金収入源として期待する蜂蜜の採取もこれまで行えていないなど課題も多く存在している。養蜂箱以外の対策も試みつつ、多様な利害関係者のあいだをつなぎながら活動を拡大させていくことが今後の目標とのことであった。その後の質疑応答では、住民のアフリカゾウや保全活動への意識に加えて、地域社会におけるアフリカゾウの文化的な位置づけや農作物被害が深刻化してきた歴史的背景、アフリカゾウによる農作物被害にたいする住民の対応、また、養蜂箱を用いた対策の可能性やタンザニアの環境政策の特徴などについて多くの質問が出され、活発な議論が行われた。

※当報告の内容は著者の著作物です。 Copyrighted materials of the authors.